

張自烈『増補字彙』について

古 屋 昭 弘

一 はじめに

本稿では『正字通』の成書過程の探索において懸案となっていた『増補字彙』について考えてみたい。

康熙年間、一部の人達のあいだでは『正字通』の作者が張自烈であることは勿論、その字書の前身が『字彙辯』という名であったことも知られていた。たとえば、方以智の次男方中通は自著『陪詩』巻一で「芭山先生初輯字彙辯、時過竹關、取老父通雅商榷」と言い、「字彙辯、後改名正字通」と注する。同じく『陪集』巻二「篆隸辨從自序」では「時先君天界圓具後、閉關建初寺之竹軒。芭山先生居止數武、朝夕叩關、商略可否、日輯七字爲度、殆二十年而成。成、易名正字通」と言う。⁽¹⁾方以智が南京の天界寺で圓満具足したのち、建

初寺の看竹軒に籠るのは癸巳の年、すなわち順治十（一六五三）年のことであるが、その頃、芭山先生張自烈も近くに住み、『字彙辯』の増訂に關して、『通雅』の作者である方以智と學問的交流を深めたこと、⁽²⁾『字彙辯』は二十年來の著作であり、のちに『正字通』と改名したこと、等を見てとることができる。父と共に暮らしていた方中通が、自らの見聞を記したものである以上、『字彙辯』と『正字通』の關係についての證言も信を置くに足りるものと言えよう。

ただし、『字彙辯』という書は現在傳わらない。原稿段階では『字彙辯』と呼び、刊行の段階で『正字通』となったとすれば、それも當然と言えようが、『正字通』以前に『字彙辯』が少くとも一度は刊行されたことを示す資料があり、検討が必要となる。その資料とは、順治年間刊、張自烈『四書

大全辯』巻頭所收の順治十三（一六五六）年、江南布政司右堂馮某の告示である。張自烈の近著のひとつとして「新鐫字彙辯」を挙げ、その勝手な翻刻を禁じている。乾隆年間刊『江南通志』職官志によれば、この馮某とは順治十一年から十四年にかけて江南右布政使であった馮如京のことである。また、張自烈は『芭山先生文集』巻九「復友人論字彙辯書」（己亥年、一六五九年の執筆）で自らの『字彙辯』を「拙刻」と謙稱している。

管見の限り、この順治年間刊『字彙辯』も夙に佚してしまつたらしい。目録その他で『字彙辯』を著録するのは『袁州府志』（張自烈は江西袁州府宜春の人）くらいのものである。そのかわり徐乾學『傳是樓書目』には張自烈・湯學紳『字彙補』十三卷十三本が、また同書目に依つた『國志經籍志補』には張自烈『增補字彙』十二卷十二冊が著録されている。

二 『増補字彙』について

張自烈『増補字彙』が駒場の尊經閣文庫に所蔵されていることを知つたのは、迂闊にも最近のことであつた。二十冊に装訂されたもので、見返には「康熙二十九年新鐫、張爾公先生訂正、増補字彙、繡谷振鄴堂藏板」とあり、一六九〇年の

刊行であることがわかる。一冊目は、①湯學紳序、②字彙原序、③字彙補凡例、④字彙補總目、⑤石渠閣新鐫字學元韻譜、から成り、③④によりこの書が『字彙補』とも呼ばれうることが判明する。第二冊からが子集、亥集の十二集、尊經閣本では子、巳、未、申、酉、戌の六集が各二冊ずつとなつてゐる。第二十冊は魏周郁『切韻指掌』である。子集の巻頭には、

宣城	梅膺祚	誕生	原輯
袁州	張自烈	爾公	増補
溧水	湯學紳	康民	訂正
句曲	蔣先庚	震青	釋疑

とある。第一冊の湯學紳自序は康熙乙卯年十一月、即ち一六七五年に書かれたもので、その冒頭には、「宣城之書、自萬曆中季迄行於今、茲家奉圭璋、人爭枕秘者百餘年矣。豈山張先生釐正其譌而増補之、書未成帙、游匡廬、殞白鹿」云々とあり、また、喬中和（萬曆年間の人、字は還一）の韻圖『元韻譜』を合刻したことについて「還一元韻藏于趙、豈山字彙藏于吳、多則百十年、少則五六十年、未有發篋而梓之行者」と言う。『字彙』の増補版の完成を待たずに張自烈は廬山の白鹿洞書院で死去したこと、『元韻譜』は趙の地（山西）に百

餘年間、張氏所増の『字彙』は吳の地（蘇州一帯）に五六十年間、ともに刊行されぬまま藏されていたことがわかる。⁶⁾張自烈の死は癸丑年、即ち康熙十二（一六七三）年のことであり、この序の執筆はその二年後に當たる。

湯學紳の序による限り、『増補字彙』は順治刊本『字彙辯』以前の原稿に由來するらしい。そもそも『増補字彙』と『字彙辯』との關係が問題になるが、前者がある段階の『字彙辯』の姿を伝えるものと考えるのは極く自然であろう。書名の不一致については、次のような種々の可能性が想定される。

- ①湯氏の入手した張自烈の原稿に正式な書名が附されていなかった。
- ②張自烈の原稿は單に『字彙』と名づけられていた。
- ③張氏自身が『字彙辯』を『増補字彙』と改名した。
- ④湯氏たちが原稿の『字彙辯』という書名を『増補字彙』と變更。

⑤一六七五年の湯氏序から一六九〇年の刊行の間に他の人によって改名。

尊經閣本自體において書名が一定していない點から見て、①②の可能性が高いと思われる。前述の張自烈「復友人論字

張自烈『増補字彙』について（古屋）

彙辯書』によれば、宣城梅氏は『字彙辯』という書名に難色を示し、『字彙』或いは『字辯』と變えるよう要求したという。⁷⁾『字彙』の作者、梅膺祚の子孫や親戚にとって、一族の誇りのひとつである『字彙』に「辯」という字がつくことは、耐えがたいことであつたとみえる。『字彙辯』から『増補字彙』或いは『字彙補』への改名も宣城梅氏の意向と無關係ではなからう。

三 『正字通』との關係

さて、次に問題となるのは『増補字彙』と『正字通』の關係である。廬山白鹿洞書院において、南康府知府・廖文英が民間の書坊の協力のもと『正字通』の初版を印行したのは康熙十（一六七二）年のことと考えられるのに對し、湯學紳が『増補字彙』の序を書いたのは康熙十四（一六七五）年である。張自烈が白鹿洞で死去したことに言及しながら、湯氏が『正字通』に觸れないのは、その存在を全く知らなかったか、故意に無視したかのどちらかと思えない。いずれにせよ、兩書ともに『字彙辯』に由來することが豫想される以上、兩書の内容を比較する必要がある。

まず、體裁の面では、兩書に共通して存在するのは、各集

にどのような部首が配されているかを示す「總目」のみであり、序文と凡例について言えば、『増補字彙』には湯氏序のほか梅鼎祚「字彙序」が見え、凡例も『字彙』のそれを僅かに變えたものに過ぎないのに對し、『正字通』の場合、版本によって様々な序が附されてはいても、梅鼎祚の序は見られず、凡例も獨自に作られたものである。このほか、『正字通』のみに見られるものとして「舊本首卷」「引證書目」「滿文十二字頭」がある。反對に『増補字彙』のみに見られるのは、各集卷頭の格子狀の檢索表(『字彙』と類似)、及び『元韻譜』『切韻指掌』の二韻圖である。『字彙』附載の『韻法直圖』『韻法橫圖』は兩書ともに收録していない。

次に本文の標出字と訓釋についてであるが、『増補字彙』の見返には、左上に「悉依宣城原刻釐訂聲韻、闡發六書、増補大小字註參拾餘萬、精詳無遺、可稱定本、識者辯之」の朱文が見える。確かに、『正字通』ほどではないにせよ、『字彙』より訓釋が大幅に増えていることは事實であり、『正字通』で「舊本闕」として増補されている標出字も、『増補字彙』においてやはり「舊本闕」として掲出されていることがほとんどである。具體例として、やや紙幅をとるが、子集の「一」「丐」の訓釋を比較してみたい。句讀點のみ筆者。

『字彙』：堅溪切音奇、伏羲畫卦先畫一、奇以象陽數之始也、凡字皆生於此。○又益悉切因入聲、誠也均也同也少也初也。〔說文〕惟初太極、道立於一、造分天地、化生萬物。又姓。按古惟奇音、後人轉爲益悉切、音變而義不變也。○又叶伊眞切音因、易繫辭、言致一也。叶上句人字。〔法苑珠林偈〕欲比舍利弗智度及多聞、于十六分中、猶尚不及一。○一說叶弦雞切音兮、言致一也、上句損一人、人音時、得其友、友音移、皆古音相叶。〔參同契〕白者金精、黑者水基、水者道樞、其數名一。○又叶於利切音意、〔左太冲吳都賦〕藿納豆蔻、薑彙非一、江離之屬、海苔之類。

『増補字彙』：堅溪切音奇、伏羲畫卦先畫一、奇象陽數之始、凡字皆生于此。○又伊悉切因入聲、誠也同也初也。〔増韻〕均也。〔易繫辭〕天下之動、貞夫一者也。〔記禮運〕禮必本于太一、〔註〕未分曰一、太極函三爲一之理也。又音各、山名、〔五經通義〕終南山、長安南山也、一名大一。又三一、〔漢郊祀志〕以大牢祀三一、〔註〕天一地二泰一、泰一者天地未分元氣也。又尺一、詔版也、〔後漢陳蕃傳〕尺一選舉、〔註〕版長尺一、以寫詔書。又姓、明一炫宗、一洪、一善。○又去聲叶於利切音意、〔左思吳都賦〕藿納豆蔻、薑

彙非一、江離之屬、海苔之類。○〔說文〕惟初大始、道立于一、造分天地、化成萬物。〔六書故曰〕說文式、古文一、侗謂式非能古、于一从弋無義、今惟財用出內簿書用壹貳參肆、以防姦易、从弋者當廢、式亦如之。舊訓叶伊眞切音因、引繫辭言致一也、叶上句人字。按〔吳棫韻補〕明言易爻辭不韻。今增誤。

『正字通』：伊悉切因入聲、廣韻、數之始也、又同也初也。

增韻、均也。易繫辭、天下之動、貞夫一。記禮運、禮必本于太一、註、未分曰一、大極函三爲一之理也。樂記、禮樂刑政、其極一也、註、四者事雖殊、其致一歸于慎、所以惑之者以同民心出治道也。又星經、太一星在紫微垣端門之左位前、歷數所始、七政所起、萬物所從出也。又大一、山名、五經通義、終南山、長安南山也、一名大一。又三一、漢郊祀志、以大牢祀三一、註、天一地二泰一、泰一者天地未分元氣也。又尺一、詔版也、後漢陳蕃傳、尺一選舉、註、版長尺一、以寫詔書。又姓、明一炫宗、一洪、一善。又去聲眞韻音意、左思吳都賦、藿納豆籩、薑彙非一、江離之屬、海苔之類。○說文、惟初大始、道立于一、造分天地、化成萬物、徐曰、大極生兩儀、一者旁薄始結之義、橫者象天地人之氣、橫屬四極也。同文備考曰、以其無二爲精

張自烈『增補字彙』について（古屋）

一之義、以其均平爲均一之義、一二三畫少易混、古文一二三作式式式、俗用壹、乃網緼之壹、貳乃加益之貳、參乃參宿字借用、非。六書故曰、說文式、古文一、侗謂式非能古、于一从弋無義、今惟財用出內之簿書用壹貳參肆、以防姦易、从弋者當廢、式亦如之。按、一二式式壹貳義通、六書故必欲廢式式、備考不欲借壹貳、竝泥。舊註存堅溪切音奇、數之始也、凡字皆生于此。不詳一一卽奇偶義、與一二通、音與一字反、亦非。又音因、引繫辭言致一也、一叶上人字、又音兮、上句損一人、人音時、得其友、友音移。按、吳棫韻補明言易爻辭不韻。今誤增因兮二音、不知易不盡用叶音也。又參同契、法苑珠林偈、淺陋無深義、故刪。（以下、一七二字略）

𠂔

『字彙』：居大切音蓋、乞也取也、又與也。〔唐杜工部贊〕沾𠂔後人多矣。○又居曷切音葛、義同。

『增補字彙』：居大切音蓋、乞也、又與也。〔唐杜甫贊〕沾𠂔後人多矣。○又居曷切音葛、義同。○一曰、本作𠂔、俗譌爲𠂔。

『正字通』：俗𠂔字。說文本作𠂔、正韻去聲泰、收𠂔𠂔、註亦作𠂔。韻會上聲銑、𠂔轉居大切、與𠂔𠂔、去聲𠂔、同

勾。引唐杜甫贊、沾丐後人。皆未詳贊本作勾、俗譌爲丐、合丐勾爲一、竝非。舊註失考、故誤。別詳勺部勾註。

この二字に限らず、ほかの標出字の訓釋の場合も、ほぼ同様の状況を呈する。つまり『増補字彙』の訓釋（音註については後述）は『字彙』から『正字通』への過渡的段階にあると言えるのである。

張自烈が崇禎末年に一度『字彙辯』を完成したであろうことは、方以智が崇禎十五（一六四二）年に「字彙辯序」を書いていることから推定されるところである。その後も孜孜として増訂作業に務め、順治十三（一六五六）年頃の刊行後もなおその作業を續けていたことは、『芭山先生文集』卷十「與卓菴弟二」（卓菴は弟張自勳の號）に康熙乙巳（一六六五）年のこととして「兄近來訂正字彙」と言っていることから伺うことができる。その後、庚戌（一六七〇）年以前に廖文英に讓渡（賣却）、辛亥（一六七二）年に『正字通』という名で刊行されたと考えられるが、『正字通』がこのように度重なる増訂作業を経て成立したのに對し、それよりあとに刊刻されたとはいえ、『増補字彙』が『字彙辯』初期の姿を傳えるものであることは、ほぼ確實であらう。

四 音注について

『正字通』の音注、特に反切には贛方言的な音韻的特徴が見られ、江西袁州府宜春の人・張自烈が作者であることを如實に示している。『増補字彙』の音注がいかなる状況を呈するか興味の持たれる所以である。ここでは前々稿で挙げた『正字通』の特徵的音注を對象として、『字彙』『増補字彙』『正字通』三書の音注を比較してみたい。

▽中古全濁聲母、平仄に拘らず次清聲母と合流

〈字彙〉		〈増補字彙〉		〈正字通〉	
秤	丑正切	秤	丑正切	秤	丑正切
鄭	直正切	鄭	丑正切	鄭	丑正切
策	恥格切	策	初格切	策	初格切
宅	直格切	宅	*直格切	宅	初格切
兔	土故切	兔	土故切	兔	土故切
度	獨故切	度	*獨故切	度	土故切
次	七四切	次	七四切	次	七四切
疾	疾二切	疾	七四切	疾	七四切

▽平聲の陰陽（歸字聲母の清濁）を反切下字で表示

蒲・鋪	團・牖	仲・健	娶・弼	匹・妓	器・薄	朴・但	毯・鏡	磬・抱	礪・披
薄胡切	徒官切	牖甲切	直衆切	巨展切	七慮切	薄密切	僻吉切	奇寄切	去冀切
普沽切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切
普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切	普吾切

渠建切謙去聲
七遇切音觀
七遇切音聚
渠建切謙去聲
昌用切充去聲
初洽切音插
徒桓切象平聲
渠建切謙去聲
七遇切音聚
渠建切謙去聲
昌用切充去聲
初洽切音插
徒桓切象平聲

▽臻深梗（曾）三攝の合流

金・今	京・經	巾・斤	臻・深	雄・兄	同・通	牆・槍	權・圈	凡・番	汾・分
居吟切	居卿切	居銀切	居銀切	胡容切	許容切	徒紅切	他紅切	慈良切	千羊切
居欣切	居欣切	居欣切	居欣切	許龍切	許雍切	徒紅切	徒工切	七羊切	七央切
居欣切	居欣切	居欣切	居欣切	許龍切	許雍切	徒紅切	徒工切	七羊切	七央切

渠建切謙去聲
昌用切充去聲
初洽切音插
徒桓切象平聲
渠建切謙去聲
七遇切音聚
渠建切謙去聲
昌用切充去聲
初洽切音插
徒桓切象平聲

耽^單・杉^山・山^咸・兩攝の合流
 都^含切 都^艱切 師^銜切 師^姦切
 立^臣・整^整・砧^斟・蒸^蒸・征^眞・珍^珍・臨^臨・林^林・陵^陵・零^零・鱗^鱗・隣^隣
 力^入切 池^隣切 之^郢切 諸^深切 諸^深切 諸^成切 諸^成切 之^人切 之^人切 犁^犁切 犁^沈切 離^呈切 離^呈切 離^珍切 離^珍切
 聲 陳^音 拯^音 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切
 稱^人切 章^引切 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 之^深切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切
 音^成 音^軫 音^成 音^軾 音^成 音^軾 音^成 音^軾 音^成 音^軾 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切
 里^習切 音^力 音^成 音^軾 音^成 音^軾 音^成 音^軾 音^成 音^軾 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切

都^干切 都^干切 師^姦切 師^姦切
 里^習切 音^力 音^成 音^軾 音^成 音^軾 音^成 音^軾 音^成 音^軾 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切 離^呈切

內 努 奴^古切 奴^上聲 奴^對切 餒^去聲 乃^對切 餒^去聲 乃^對切 餒^去聲
 合 橘 僻 諾 入聲字の直音注に陰聲字を使用
 胡^閏切 含^入聲 厥^筆切 鈞^入聲 匹^亦切 聘^入聲 尼^各切 那^入聲 尼^各切 那^入聲
 * 侯^閏切 含^入聲 厥^律切 居^入聲 披^席切 批^入聲 披^席切 批^入聲 侯^閏切 呵^入聲
 險^殘・塔^賴・貼^鐵・籃^蘭・甜^田・
 虛^檢切 脅^上聲 財^難切 音^潺 託^甲切 他^達切 他^協切 他^結切 盧^談切 離^閑切 徒^兼切 亭^年切
 許^檢切 掀^上聲 才^寒切 音^蠶 徒^荅切 徒^荅切 他^協切 他^協切 離^寒切 離^寒切 亭^年切 亭^年切
 許^檢切 掀^上聲 才^寒切 音^蠶 徒^荅切 徒^荅切 他^協切 他^協切 離^寒切 離^寒切 亭^年切 亭^年切

▽反切用字として「奴」「胡」を避ける傾向

囊	奴當切諾平聲	*奴當切諾平聲	乃昂切諾平聲
寧	奴經切佞平聲	尼形切佞平聲	尼形切佞平聲
農	奴多切音濃	乃同切音濃	乃同切音濃
納	奴答切南入聲	乃八切南入聲	乃八切南入聲
賀	胡臥切和入聲	呼課切訶去聲	呼課切訶去聲
蟹	胡買切音駭	呼買切音駭	呼買切音駭
惠	胡桂切音慧	呼桂切音慧	呼桂切音慧
含	胡南切音涵	河南切音涵	河南切音涵
鹹	胡碧切音咸	瑚碧切音咸	瑚碧切音咸
回	胡爲切音廻	戸爲切賄平聲	戸爲切賄平聲
丸	胡官切音完	*戸煩切音完	胡瞞切音完

以上からも、『増補字彙』の音注は『正字通』と一致することが圧倒的に多いことがわかる。不一致例(*印を附したものの)の大部分においては、『字彙』と『増補字彙』の間で一致が見られ、訓釋の場合と同様、『増補字彙』が過渡的段階にあることを示している。

五 おわりに

上述の如く、『正字通』の訓釋は概して『増補字彙』のそ

張自烈『増補字彙』について(古屋)

れより大幅に多い。標出字によっては『増補字彙』の訓釋が『正字通』にすべて含まれることもしばしばである。『増補字彙』が『正字通』よりあとに刊行されていることから言え、前者が後者を刪略して成ったのではないかとの疑いもありうることになる。しかしながら、『正字通』を刪略して『増補字彙』の形にするには、かなり煩雑な操作を想定しなければならぬ。たとえば『正字通』の音注は『字彙』と同じく反切と直音から成るが、異讀のある場合、韻目と直音のみを示し、反切は省くのが通例である。これは凡例で規定された體例のひとつであるが、『増補字彙』では『字彙』と同じく又音反切も掲出されている。たとえば、

〈字彙〉

〈増補字彙〉

〈正字通〉

三 又叶疏簪切音森 又疏簪切音森 又侵韻音森

上 又叶陳羊切音常 又叶陳羊切音常 又陽韻音常

の如くである。『正字通』から『増補字彙』ができたこととすると、全書に涉って一々『字彙』によって反切に戻しなおしたことになる、大變な努力を要する。まして『増補字彙』のみに見られる訓釋や、『正字通』と一致しない反切も皆無ではないことを思えば、やはり湯學紳の序に言う⁽¹⁵⁾とおり、未刊行の原稿に基づくものと考える方が自然である。

おわりに、音韻史研究の立場から『増補字彙』存在の意義を考えるならば、第一に『増補字彙』と『正字通』の音注、特に贛方言的特徴をそなえた反切と直音注の大部分が兩書に共通することから、兩書の資料的價值が確定したことを挙げねばならない。つまり、作者及び成立に關する疑問點がほぼ解消し、來歴の確かな音韻資料となったということである。

『正字通』の作者の問題は康熙年間に解決済みであったにも拘らず、いまだに張自烈の干預を一切否定するような廖文英作者説が間々見られ、⁽¹⁶⁾『正字通』の資料的價值を不安定なものとしていた。しかしながら、廖文英と關係のない『増補字彙』が、音注・訓釋等あらゆる面で『正字通』の前段階の状態を示しており、しかも張自烈が晩年に至るまで『字彙辯』の増訂に務めていたことが判明した以上、張氏の貢獻を認めない廖文英作者説は全く存立しがたくなつたと言えよう。今後の課題は『増補字彙』『正字通』の音注全體を資料として、張自烈の讀書音の體系を明らかにすることである。

〔注〕

(1) 『陪詩』『陪集』ともに未見。余英時『方以智晚節考』(増訂擴大版、允晨文化實業公司、一九八六)附載「方中通《陪詩》選抄」にも見えず。ここでの引用は任道斌「方以智年

譜」(安徽教育出版社、一九八三年)よりの再引。北京大學中文系、何九盈先生の教示による。『篆隸辨從』については『小學考』卷二十八に「江南通志曰桐城方中通撰、未見」とある。

(2) 『正字通』「引證書目」所掲の諸書の作者名が姓名で記されているのに對し、方以智の『切韻聲原』『通雅』のみが「宓山」と號のみを冠されていることも、この時の交流と關係しよう。

(3) 前稿「張自烈と『字彙辯』」(『東洋學報』第74卷第3・4號、一九九三年)一〇三頁に引用済み。康熙年間刊『芒山先生文集』卷十二所收の「字彙辯序」は年月を記さないが、張自烈生前刊行の『芒山文集』雜序卷之五の目次に「詞刻」として「字彙辯序」の名のみが見えるところからして、崇禎年間以降の執筆に係るものと思われる。即ち順治刊本『字彙辯』の自序として書かれた可能性が高い。康熙三十八(一六九九)年刊、黃宗羲「明文授讀」卷三十二にも張自烈「字彙辯序」を收録。

(4) 前稿一〇三頁に言及済み。

(5) ここからも『傳是樓書目』の「字彙補、十三卷十三本」と『國志經籍志補』の「増補字彙、十二卷十二冊」が同一の書を指していることは明らかである。卷數の不一致は附録の韻圖の存在によるものか。なお、張自烈の書以外にも、吳任臣『字彙補』(康熙五年刊)があり、また、乾隆年間には『增

補字彙」という別の本もあったらしい（光緒年間刊『増補會海字彙』に序を收録）。

- (6) 趙蔭棠『等韻源流』（商務印書館、一九五七）によれば、番中和『元韻譜』は萬曆三十九（一六一一）年の頃に完成したものの。湯學紳の序では、『字彙』（一六一五年頃の刊）から湯氏の時代（一六七五年）まで「百餘年」、『元韻譜』からは「百十年」、『増補字彙』からは「五六十年」の年月がたっていると言うが、これらの數字には誇張があると思えな。とはいえ、一六五六年頃の順治刊本『字彙辯』以前の原稿を指していることだけは確かであろう。なお『等韻源流』二一九頁には湯學紳「増補字彙序」の一部を引用しており、趙蔭棠も張自烈「増補字彙」を見ているらしい。

- (7) 文中には「來問辯字彙、梅氏後裔、慮不能隱默、存『辯』請削『彙』、存『字彙』請削『辯』、如是而後可以杜其口」とあり、宣城の友人が梅氏の抗議を傳えてきたことがわかる。張自烈は、「字彙序」を書いた梅鼎祚の孫・梅朗中と交友關係にあったが、朗中は崇禎年間に死去しており、この時の宣城の友人とは沈壽民のことかも知れない。なお、自烈は梅鼎祚や梅膺祚（鼎祚の五番目の從弟）にとつて子の世代にあたる梅士享のため傳を書いている（『芸山先生文集』卷十六「明文學梅伯獻傳」）。

- (8) 内閣文庫藏『正字通』（經五十二、一三四五八、五十一冊）の見返には「白鹿書院藏板」の朱印あり。建陽の成萬材が刊張自烈『増補字彙』について（古星）

行したものであるが、五種の序のうち二種（廖文英と張貞生）は庚戌（一六七〇）年の執筆、三種（尹源進、黎元寬、姚子莊）は辛亥（一六七二）年夏の執筆に係る。この版本と、一般に初版と認められている弘文書院本との關係については、別稿「『正字通』版本考」（未發表）に譲る。

- (9) このほか、弘文書院本（中國社會科學院語言研究所藏）と芥子園本（内閣文庫藏）には「姓氏」の項あり。鑒定の龔鼎孳・張貞生ほか全一一一人の名を列舉。

- (10) 叶音の例とはいえ、日母の「人」と禪母の「時」の關係は普通でない。これは日母と禪母を混同する吳語の影響によるもの。別稿「『字彙』與明代吳方言」（未發表）に詳しい。

- (11) 「又音各」については不明。

- (12) 前稿一〇二頁に引用。『浮山文集前編』卷五所收。

- (13) 「『正字通』和十七世紀的贛方言」（『中國語文』一九九二年第五期）。

- (14) 「抱」「妓」は全濁上聲字のため『字彙』ではそれぞれ「部巧切」「巨起切」の反切もあり。

- (15) ただし、初期『字彙辯』の原稿が、一方ではそっくり吳地方に残り、一方では張自烈自身により度々増訂され、のちに『正字通』となったとすると、原稿が少くとも二部はあったと想定せざるをえず、これほど大規模な字書のことだけに、やや不安がのこる。

- (16) たとえば、丁鋒「『正字通』著者是廖文英」（『辭書研究』

中國文學研究 第十九期

一九八四年第一期)、胡迎建「《正字通》作者應爲廖文英」(《古籍整理出版情況簡報》第二一九期、一九九〇年八月、語言研究所的李榮先生的教示による)。なお、前稿で不明とした國變後二十餘年間の廖文英の足迹その他について、以下のことがわかったので附記しておきたい。康熙年間刊『連州志』によれば、崇禎末年、廖氏は袁州府知府になるが、服喪のため歸郷、のち洪承疇の拔擢により衡州府同知になったと言う。同治年間刊『衡州府志』によれば、廖氏が同知になるのは順治十五年のこと。また、羅香林『客家研究導論』所引『崇正同人系譜』によれば、廖文英は客家の出身であり、彼の故郷・連州や、知府になった南康など、みな客家の多く住む地域である。張自烈の贛方言的な音注をそのままにして出版したことも、廖氏が客家であることと或いは關係するかも知れない。

〔補注〕 順治年間刊『溧水縣志』人物志(孝子)には湯學紳の小傳が見える。白鹿郷の人であること、繼母への孝行により順治十一(一六五四)年に表旌されたことがわかる。また、游藝『天經或問』(和刻本)の張自烈序によれば、自烈は甲辰(一六六四)年『字彙辯』の刊刻のことで福建に行っている。